

30

25

20

15

10

5

大正七年二月下流起革

特別  
14  
1919  
751

自叙傳材料錄

一



176911

材料としまくわ

一 憶起録 一九一九年終り記

久月二十七八年源氏の事記一九一九年

不完全な自叙傳

一日誌 納立丁冊

二十九八年 前後と断続して記し

す

一 祖先の系歴

丹波石川銀

経著中

す

一 家業の事歴 金工材料と修繕一九一九年  
家業の事歴 金工材料と修繕一九一九年  
并に同材料と修理用具の披文所

の子年生せ年十二歳と海を掘りと  
こうう

一 王家の歴史 祖父自著の家記、家  
聞一子家のものと記してある。

一 春秋簡牘 祖父自著の家記帳而

形のもの

碑文

三箇所碑文

北半秋訴

余の事記

勘笑記

先高桑傳と聞る。

江の終り在社中の多歴

江より切抜

物者録

自著の著手本

高の終り在社中の西鷹作

高メ核抜

新内より機代近博根  
早瀬而應以代西鷹作

日経書  
中(ちゆう)明末(めいばく)  
考(かう)明末(めいばく)

國考刑行令仕未

考(かう)明末(めいばく)  
考(かう)明末(めいばく)

大隈而後接令成統

施(せき)帶(たう)中(ちゆう)

房狀口述

内(うち)大連(だいれん)に置(おき)てのものと述

早瀬而大連(だいれん)に置(おき)てのものと文考

日(にち)校(こう)支(し)今(いま)、一一一、日(にち)漸(じん)

逐(よひ)席(せき)口述

無資格事件(じけん)事(じ)類(るい)

双魚(そうぎょ)事件(じけん)口述

各年、丸善什記

家有印譜

繫獄記 二冊

協贊日總

柳浪紀勝

舊夢談

あらわしの花の  
あらわしの花の  
あらわしの花の

田春日總

外祖東坡行

田山穂堂

山田玄蕃、田中柳風傳

早稻田大學の紀念録

久松旅記

久松・官事帳

著書

新葉放生堂

新葉・聞す一件

里白日總

新葉・聞す一件

高田洋次平氣全說

柳石論稿

高木義揚氣全說

張之教冊

笠置園詩稿

笠置園詩稿

吉田繁之判決法止狀

吉田繁之判決法止狀

今古雜談

印刷本  
吉田繁之判決法止狀

和菴文

和菴文

新舊政改文

新舊政改文

鶴田氏印行

五音の印の代りに改めて  
印の代りに改めて

色北銘

家家主記地元を北風と  
花の記地元を北風と

西行

四月二十三年

三内行

二十七年夏の後之に

自叙傳順序 大正七年二月九日 起筆

書  
自叙傳を書きとるにつき

近々多びて身の麻痺を感じし自叙

傳とほの思ひに迷ひ其頃の改易すあり

自分の往歴以後に貴重な機会があつたから

筆を手に間を経て書くに至り

ちくちく、へこす、もろもろ、何れの道找料をあ

るかと思ひ立つた也

友人後事と其の原記絶念ゆゑを編

了と美と余りよおうとしておもふる

山林堂のわかの島の山田一市(山田一市)

えども身軽遊多きよしとす。其後北江二  
四ツ山念頭を余の日学修出未だものとす。  
山一山の傍天下之記ある。余も日夜日夜御  
城下廻る所とす。さるありて五十年後北  
山、余はゆうて侍と立るよりか、またの事と  
そと思ひしに、されば先れ見えむわたり。已  
れへはまこと處の侍を拝施せらるといひぬ  
松本朝倉の仕事、こんな塩梅とあがんば  
ぬあらゆると自取保持とひりうみひも  
あう。自分の手筋とあくへとえひひと  
そく人の在所にてまめめめめめめめめめ  
今も二十年前と聞い母伯先生自叙

侍へキよと羊ヤセシニモキ。萬葉の蘇波  
五十枚の母子とタマヒキ此も憶  
起紙一名東路りてよまふくと西也と  
見るつり。伊稚一うきと方ひ度と後ひ  
不く氣も出さい候ふとゆ。あくへと角  
あら代也のほ歎のあくへとじ。これ、お  
こある。あくへと四十章の事。うなぎう  
けとくま元ひあくへとええ丈とハカル  
しきよひあ。

ひまとうといひ、憶絆の氣を緩めず庵う  
れまいあらう。

大患後自分の復活し月つ健康を恢復して  
得ては執筆のお蔭もあり、此の政界とく  
の方面に涉つてから各方面の政治文、文  
(十七)年間の手稿を全く、歴史とともにえ  
よるが、それを何とぞお読みあれと  
天令三十一年春の上、三十一年してある  
うが、自分とよきわざと生きとしきに及り  
うかひあらう。自分の手でこれと見てること  
うがやな

大抵の入信は東方面のもの、開印でわざが其

人の性格のよき跡味方面に現るる、いふてある  
自分のえ、聞こす事、磨きをねどちいて至る  
つとも、もともと体にうへたるも北方面文  
化を敵に仕立てちりし元よりうと思つたのが  
勤務の会社の自叙傳とて思ひまつてゐ  
つてゐる

極味と云ふとあら骨董もの見る本との  
ええのひもとくい、固ち何う事もや少販の  
業と文とよ生と考へてはまち執筆  
もとある

身と要らずと口に紹介する所うあ  
うえは自叙傳とひる場所に記念刻え

材料う豊富ひき、二十年計り法を計め  
そくちのじゆくま大患後のまことにひ略  
ひらひの冷ひ風ひ此ひ日月と或ひるのこ  
ントとのまの料とくまにさきぬかし日法の  
かくまくのまとまを教へては隨事手扱  
のまく、約三万冊存する。まの外ひソム  
ビス移動へと自分の海賊本記のことと  
せりとてはるが母の手にねり保有さ  
れども大抵材料はあつて  
多くが北の思ひ主をあててけんあつ材料  
ともうまくつかのまことんあつてててててて  
ちまくけられると巻紙に氣化れもの

えり入りのまわあ、サット三十枚もあり  
所多くやまとひまよ大紅塵ひらちやねび  
う往歴の方のまう御ひあまことまく真に取  
入つ程のまわあ

えりゆゆに自叙はと心とまや熱あることあ  
すくもとつまわす五十九九年に刻へて大  
略の年もとれつてることう肝肾ひあ  
ふまの身のまど一年月の記憶のまくい  
かのまくい、日紙もとまく写傳のあま  
記田代へ益へ歸へようと思ふ、二十年半  
の日記を且ううと繰り返してえれこと  
もあつて、此論を於て初の後まつの

差し出でゆるに之れを用ひる事は少く、  
無意味徒勞のものと考へて放棄する事  
ある

年表を以つて凡て自らの生うる事歴を記  
けてえども、ばつよくその事と考へ記す。い  
あくが、よりおむね是の事にあらり  
時勢や開拓の種々の材料、肥料、肥毛、  
洋服(アラモ)、これと年並のゆき、  
其江戸の中には、やうやくえちごと  
不ふること、う波(カムイ)の今年のものに次ひの仕  
事がある

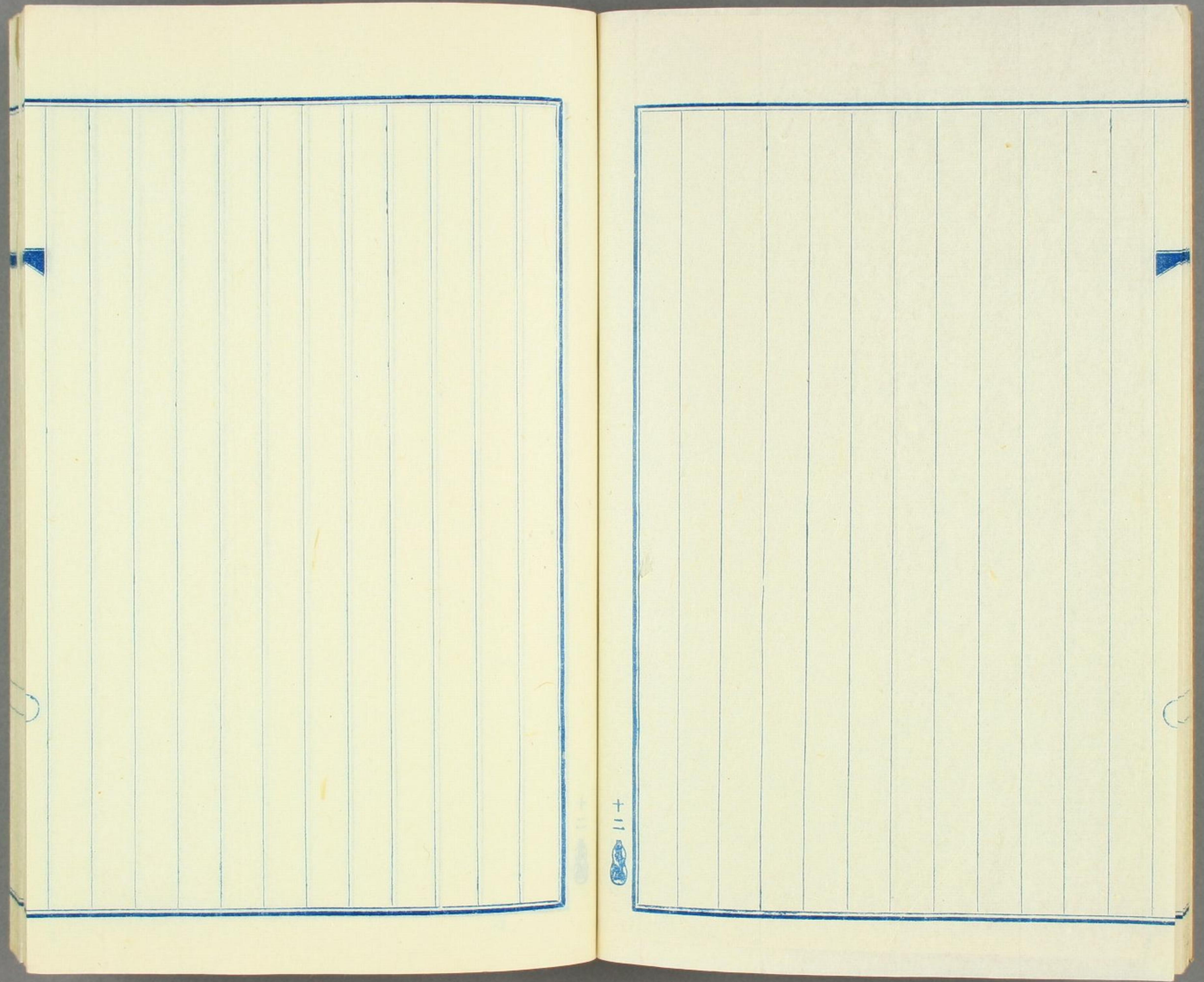
ひきよし徳年體に家祖のるるを、うな  
き現す所、うな考るものあきらかに役金念を  
比附する定めも見えてくる。まんて確うる  
ものとあく程自分のう傍仕がある。よそ  
の時間やうも、見る政味を感ず  
寧ろ断片的じ時代や事項に分つてある  
けは枚数の折衝(ハサシ)ある御令文と追々あきら  
めを被拂しと自叙傳とあらじこく、方  
の見の企として、いきつた仕事う間の山で  
至、まへる、實行のうちあり、結果は即  
て宿主の手をもとすと古の事と申す  
く記す。上古史とも接する事なし

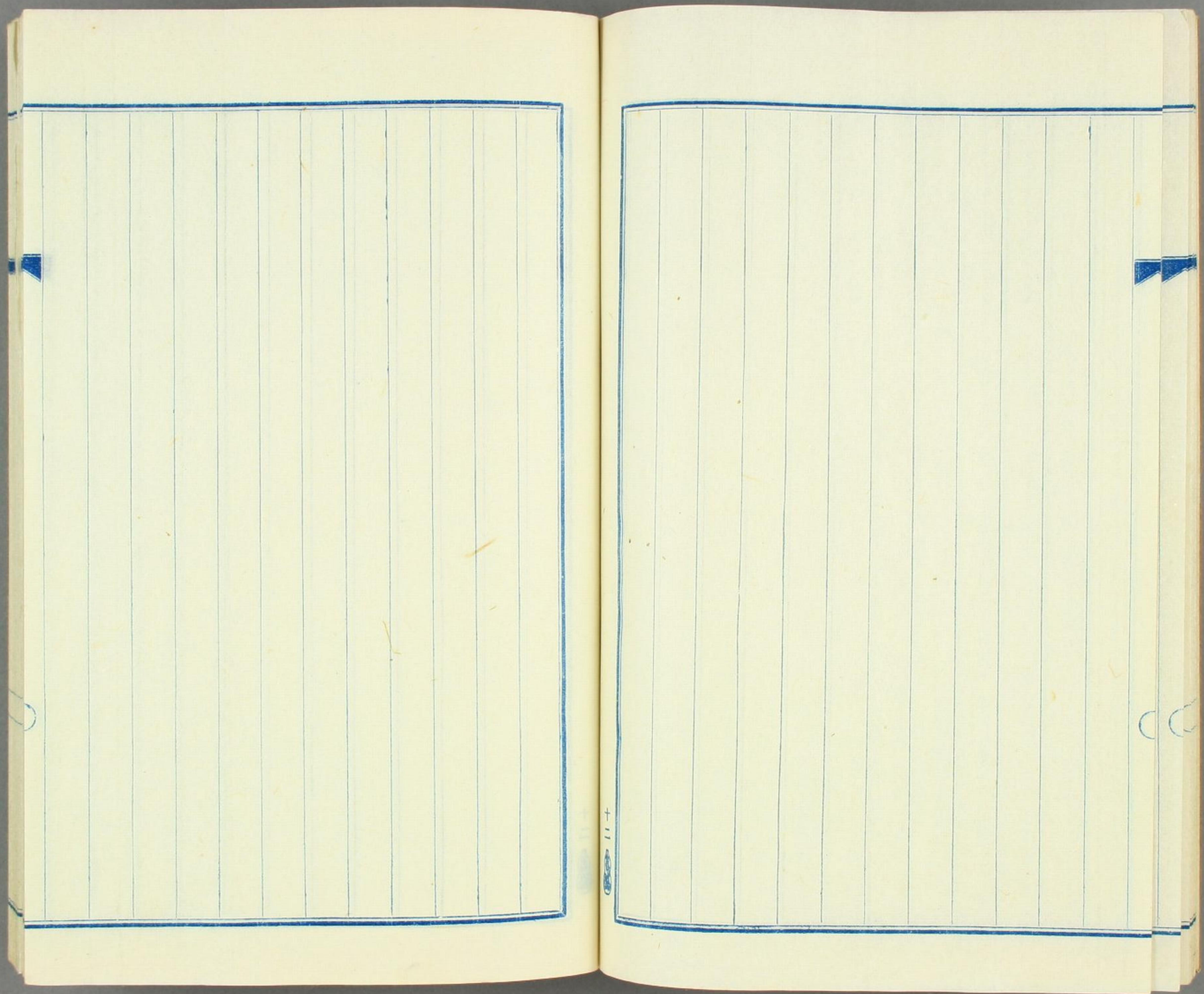
九月

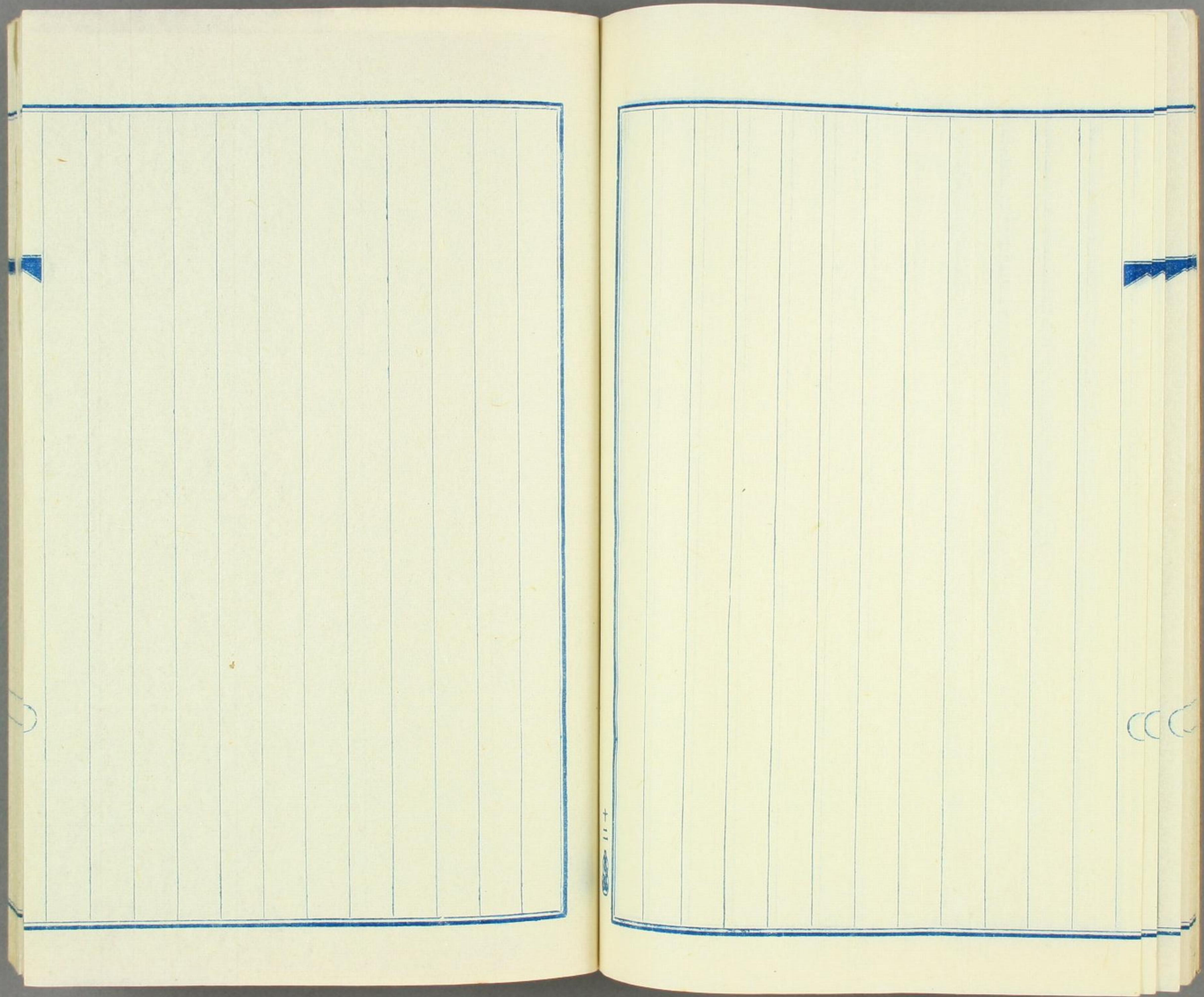
さうへうんふすと企つて校をとどめし  
えううち限候にゆきえまばぬくまつた。  
黒をあらん歎うるか一ノ元一ノ革と

投す

大正七年二月廿二日録







初年時代 あうすじ

十二

- 一 紹のゆき渡り歴史とまよひのよき無  
美准豪傑レノ然リニ後人也其代モヤ
- 一 係し印年のゆき内田園境に創レハ許  
ヘキサザリ與つシモミ、自アハ平凡ひもモ  
園境ハ平凡ハ無ヘ
- 一 自今の生れシタリ之を萬延元年二月十九日ト之  
ルをシキナシトテシト延也(三月三)相馬の裏又  
起テ伊豆大元ラ殺シテ、攘夷論者主ヒ  
ニモールの主即テ自らの生れヒメイア
- 一 貞アハ既ルニ言ふニシカア、自アハ生え

たあさま元地う狹くううせ井伊大えうせと  
解くじゆひあうと、自今う大限候ひもあうと  
この威言に面お味と生すうじうアハ  
自分の初名を雄三助と云ひ、英雄：ちや  
うじああうじうが初えか父う酒飯をあ  
つらあう印時五むくあうれ（今）の胆膜炎  
：難つじゆひ、終く名を湯ひと改めた、ま  
澤ハ上杉彌信の名を因して彦魔と威  
度さんと速信ハ半傳つて改名してのちのそ  
る、英祖と云ふ佐ハ彦魔即征賊う出来  
才媛の彦魔とすり大豪傑の名を藉  
り比のてあつ、黒トあつゆえ也んじ

一 倭人の名ニ就こあうひりと三十前後春城  
と云ふを鶴としニ居る、ニルク領城ノ春  
山主本此の山、既ニ治代の一字をえり更  
々其の城池のれと取つじよれとを治代  
と一鳥ジタル有る、松平氏・十河・つが室  
ハ鶴山いぢ、自今う年あこ一家と相ぐ  
あり、ちゆうけの代：かくこ（吉）友八山の  
貢南（まんじゆ）、余と送了モモツムリのセ  
ルシヒれ、接ち江鶴ひ、貢南を譲れ、これ  
北雅彌、印を心くをしてえひ、えうせり  
跡のうむあいあう

一 貢ラハ往か革余の渦中ト生れ、其女氣

の間に生長して、幼子も、革人余の戦  
士も萬遇一比と云ふ。ハ、相敵ひあら今  
ハ自らの立場に立ちて、自らの立場に立  
て、元氣ひあつて、革食哉のうきり一ひあ  
つらうら。

一 戰死の報うるる既に自家の家家へ兵禍を齎  
し、自家の家家へ兵禍を齎す事は往  
く多く半治し又宣軍の太兵太兵もまた  
有し、自らのありまき革下革下もまた自家  
の全印を宿す宿すえど、革下革下もまた  
徒徒のサシサシニ忘てられ

一 九ノ段伐の元地ふ脱ハ危険とあ所所、所西

備前郎の主の御用と云ふ、不々也うあつて  
納屋納屋うあつてと幸いよえん、避難避難しこ  
御方御方うあつて御方御方も起つて云  
うと信流川信流川、信流川一役一役標斷堤防  
決潰決潰、堤下堤下家家に跡跡をもつて自家自家  
ねず毛毛毛毛艇艇に乗つて危危天天めら満  
々々泥泥舟舟流流の上上漂泊漂泊にすむひも  
茅尾茅尾ういくつも渙渙流流さん目前目前と  
くくえ里里を被被うも學校學校の風風と記  
べべうら

きをうながす方面にては敵より無人かの活潑  
として之を況にやうすく敵うちうら、西  
条も危険とえず所、三浦村の赤川に過  
難しことに記憶に存じる。

一 久々此の未だその革金、紙とえむひうじ  
至く、其後御番兵とまづの事に接觸  
し、えど北うちうらの地方御府政廳を  
眼前にえ、歴史すのへあまも描すこと、  
うつむ。

一 えど向ふとまと革金收とせし御番  
府、うながして、まづ住地とまづひうる、自  
合りマア乃ゑ而、お自分の初代の家の址

乃ア戊辰の兵燹に罹りて家家の内邸址  
に走れんじ、其後府を廃し御番所の達  
つじのそ六四じ跡をひき、御番の片田舎に  
府より政廳の設けんじきと、奇る所ひ  
もありが實を全ふに匹敵うきと革金萬  
家の多くうに天鉄ひあつて〇故に地形う  
もハ無い

一 地方政廳を設くゝる、証子を多く家の間條壁  
ひづは無い、まと御番所の木林、とて  
を寄附しとえと付當一にひ、自分の  
家の寄附の林木を幾十の車に勧せん  
運搬せんとえひと自分も小使ひと興味

をそぞく材木の上に載つて轍わ國と通し  
ハリモ風び家前もと通る古事記の地形へ  
宇佐の印を紹く呼ひう。田園も土と  
草と木と水と山と河と川と、無論  
自然と稱称するものゝ田乗一と云つて、切  
りくさみ自力と経営である。然るに之  
一株より起つてのじ地筋りして、木架と之  
ある橋と勾配と名いあつて車う  
北橋と下の金湯と自力ち車上う塗  
車一と車輪と觸れんが、自走ひ  
車と同時に止まると、車一車う止ま

らうんじろくは北の車をもぐ自力  
ハ無論じうつじひある。元禄とすとえあ、  
八百今の佩りしも長つて脚差う勒玉  
レカラ車輪と走きうえの車と支  
へばあくま車うち打傷を負ふんが、い  
うううと浮か、刀の中央をもゆつて、わ  
んうううで其力と格に直一車も獲  
刀とし候所と矣。

一 政廳う置えに結果としソシテの役へうま  
た、まよ既ハ今ノ政跡の御もと、だ、や  
め一也方のもとハガ歌家の人おひ、タの  
歌狂の歌ふ才支ひハ無アム、北中、こ應

前田家  
方

丈上の人物とまじりては人もあり、前原一誠や  
三木五郎ひ代の人のよこせが、身をすすむに奥手  
道筋を引くのよろいである。それ以後と云ふ人も  
未だ六民改めをうけた無いうえ昔の様子も  
随分色々の西を寺社を出でてもうれしき風  
リうへてあつまが自分の觸るぬ人ハニコ有

一 西園寺侯が多角にオルニリを侯ミ十七歳の  
間もあらず、侯は自今の家ヒトキの多角の私  
の家モ未だん自家の家ミ内歴アレル  
ある御ともの歎き御自身の寝言アリケ  
ルアリ、前多角を全くのもの隠スルルトモ

官印し政能ヘリ勤ヘリよが奥手トおえ  
てあらうとゆれまうてシテ多角家ニ加シ、奥  
手丈ハ後年今くの家を宗祇院居内納  
一比縫ててゐるくねひ、本ヒ、又和復ヒ  
主ハ「お原の陣、命ヒ」の長つてラクシアヒ  
カヒ十二歳在院モもあつてラクシ、日々陣元  
ハ少君男とシハ多角を國裕也、  
勤しむ程のま後を蒙サセビアリ、或ハ  
後年洋行ナリ冬至一ソジ、先ヨリテラ  
片の金ニえあへとえ骨也スこと、ラキ  
ルのりくめふ事ひある

一

西園寺侯ハ既ての人があつまがゆき代等元

とて限りをつゝ過つてことの無ひ、改めて  
御がの無の自今にえつてのちに御運ひ有り、  
前不つてと翁の乱の前自今う手を取る事  
中出をもんじこつあつて能公(義雅)  
にはつる木楓竹の並居に今しおのが  
玄後である、永和十四の玉堂を掌められ  
閑居もあらが自分と長じては洋行才に  
没したがままである。おもソ紙上に乃  
て懷舊の圖にわざぞ北人のよびやせの  
のあやこあいどりが、さう絵句へこすへて  
えそしむるへう無。

一 周令のまゐりあつても園境へ施すお凡ひの

まゐりあつても園境に育つて何れ見たりお凡  
ひあらが取入るおもえきのり園境の感をな  
得無じ無い、後年自今、政以上の政策を  
風一章筆の代とえ、後況しての此  
茅のお産と謂ひたと得ぬ、もとより此  
方而へ全く失敗ひあつム。

一 自分のちねり後みめあはるか六歳の時、元  
三字往えもんを往くと多く眼病がちつて  
家へ家庭教師として漫然と近い原  
とく人があらまえを生えど六鶴田法印  
印のものと毎日習ひ出づけた、此の鶴田  
主ま人ハ日本ノ神功神社と號して云

比所主自今と神社の社領に數を定めん。此  
の宣は今迄くまとまえども未だモトヤの心  
ちうひ、勿論自人の獨りで誰か手を取る事  
どもう江津ひきい、何なまへ酒をぬる耶  
三社殿の傍に酒を温め、今ども用意にあ  
るが、大キス井、薦善アシハシナマスを入れ、ナリ  
嘔嗞アヒタツき三杯を手に一盃へと此人  
八市ハチシテ。数年前より人を垂れ下すこと  
と湯をうながる。五峯の酒アサヒ人酒詮中  
の体や酒を詮アシめり。女メイ人酒アサヒを詮アシめ  
、瑞アラタくいおせしろい人ヒトおひみつに北への  
勤王の手跡ハンドや其の他の。酒アサヒ人酒詮中

一 鶴田カツダ本宅ハコヤ、寺子舎ミコヤをもつてそよに秋アキだらう自  
今獨りりつも社取アシタツひ焉後アフタを立タチて、見ミを物  
別アリ遇アリ。とあると思アシタツ、自今ハ本宅ハコヤを寺  
子コノ、入アガムし、シテ、此アシタツ法印ハシマツと  
氣エ核カツるべひ布アラタ家ハセと設アシタツめアシタツ、ことをハ  
つとえ、何アシタツか好アシタツめに扱アシタツつ。あう、ちう  
ま浮アラタや、自分に我アシタツの筋アシタツ動アシタツうあり、縄  
印ハシマツをサンアシタツ印ハシマツ。されどことどうあつて、其次  
行く時アシタツ父アシタツハ僕アシタツに松葉アシタツとわらアシタツを前アシタツ  
の手アシタツを詮アシタツえさと見アシタツれ、とそとてお膳アシタツ（  
シタツ、ゆりのよと外アシタツに此人アシタツつキねあ

記憶に残るが、幼の時代のことを尋ね  
たときあるのを心にすくに覚ゆふとぞ人ひあ  
る。此人の名を不知。江戸の教父(おきな)といふ  
とも此人の名前と消えんと、自分たちも  
うのうおもに其役とつてゐる。

二、鶴田の小僧を入れて、

鶴田宮

字ハ公宮通称真人大塊又開未と號す

秀承の入

大塊御僅三うの即の士道家者流に隠る者多也  
大和り大峰山に住す竹末氏武を以て若川の永禪  
被後ニ奉り修驗地福院<sup>御城</sup>をえど上林氏仕  
ひもし欲<sup>王</sup>果<sup>大</sup>遂<sup>木</sup>修驗<sup>夢</sup>多寶院<sup>度</sup>を  
移居<sup>建</sup>之<sup>二</sup>に住す賀磨中<sup>鎮</sup>護寺<sup>と改称</sup>  
一詣訪神社の初官をあくまで十五世の孫と皎巖<sup>と</sup>  
いふ道名<sup>有</sup>大塊乃<sup>は</sup>其子<sup>う</sup>家<sup>す</sup>と皎巖<sup>と</sup>  
受<sup>サ</sup>皇漢の学を小田嶋<sup>日平</sup>鳥<sup>に開</sup>姓<sup>と辛多ス</sup>と  
更<sup>ヒ</sup>善<sup>レ</sup>乃<sup>ハ</sup>木氏宇多源氏<sup>と云つ</sup>との所と云

萬延庚申上洛<sup>レ</sup>大先達阿秀梨法印<sup>と叙セラ</sup>  
れ麿<sup>紫</sup>全衣<sup>と許セ</sup>明治己巳神佛混淆の  
禁<sup>モ</sup>復<sup>節</sup>レ<sup>の</sup>又鶴田姓<sup>ヒトシ</sup>と<sup>更</sup>の真人<sup>と稱</sup>す姿  
性慷慨<sup>レ</sup>氣<sup>モ</sup>買<sup>ハ</sup>風<sup>レ</sup>同志<sup>と勤王</sup>と囁<sup>キ</sup>  
慶<sup>モ</sup>而<sup>モ</sup>底<sup>モ</sup>遠<sup>シ</sup>恭<sup>モ</sup>忠<sup>モ</sup>我<sup>モ</sup>士<sup>モ</sup>浦<sup>モ</sup>垣<sup>モ</sup>原<sup>モ</sup>  
信<sup>モ</sup>作<sup>モ</sup>起<sup>モ</sup>走<sup>モ</sup>私<sup>モ</sup>茅<sup>モ</sup>謀<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>乃<sup>ハ</sup>退<sup>モ</sup>花<sup>モ</sup>七  
而<sup>モ</sup>事<sup>モ</sup>托<sup>モ</sup>之<sup>モ</sup>京<sup>モ</sup>攝<sup>モ</sup>も<sup>も</sup>め<sup>め</sup>こ<sup>こ</sup>入<sup>ラ</sup>し<sup>シ</sup>乞<sup>フ</sup>上<sup>モ</sup>  
聞<sup>ク</sup>志<sup>モ</sup>士<sup>モ</sup>聲<sup>モ</sup>息<sup>モ</sup>通<sup>ス</sup>戊辰七月官軍<sup>新<sup>モ</sup>若<sup>モ</sup>高<sup>モ</sup></sup>

官軍頗る偵察、因ひ大塊私に晴夜に乘し上流を  
渡つて詳に敵情を擇り歸つて之を報す是に於て  
大旆立て今田村より進み西岸の敵兵を犯逐、一  
本にて船橋城を拔き轄へてハリ、う津川と衝  
く大塊獨逸寺と名め、我即ちす平らき官峰  
之を賞せしもとす大塊辭して更に方外の流何乞  
賞と徵めもと因て同志の功を推奉、袂を拂ひて  
而してゆく時人以て傍西行の風と為す後  
神明宮・祠官となりし亥二月病りて歿す  
享年五十四四十日歸停寔、常其人と稱す曰  
く老即の道家焉流等ふ輩道主多生て接く  
所謂俗様うちよ大塊獨り時俗に媚ひ不斬

然唐板を取り人或ひ之を議すよ顧み不明治の初  
一村一祠の制出で西國神社と神の宗に合す大  
塊乃ち西國の神輿を焚燬し御臺そいへ  
勇断に致うまい五動勝先又曰大塊むち  
易理に精し竟に羣衆肆の夷平と云い經年  
中人を駆かて日明の卯自笑又曰大塊少時  
をぬや一と弟も中年以後棄てあんうと豈亦  
能居小技大丈夫火りあつゝ所とすまか遣  
稿一書すが爲て自天に因て抄本を得

春日雨中

街頭泥渭少人行日茅櫓厭雨聲  
以未拍敲先示客花因移植偶題其事

露芽一株時睡、苔葉三重恰  
春光無家許、掩門徒好砧

夏夜即事

胡床夢二日西斜、酒渴呼童瀹苦茶  
忽見鄧桂簾自捲、颶風旋轉雪毛毛

夏日霜詠

謝客柴門盡不聞、看書眠牕里甜催、夕  
场鉤在隣園樹涼影山風侵未  
遠雷聲細有小橋前、仄滿四樓涼似船  
何處早村先得雨、殘雲遮月立半天  
吟誦有比多い憂生、生動立山老翁話十の  
物語又舟中即事

極日蒼巒に暮毛漸、停舟獨主大江渡、  
宍斗陽在汀洲外、八人枯萎盡欲墮。沒入  
元戎河聲響、鷺川上のえ里豪す。佐の川と済  
つて敵防と侦察する。寧んじ立詣する地も  
上岸セリ。北へと向ひ色やニ。

北法印を其の鎮護寺極と云ひ或は玄光院と  
て書つて、寺うちうんひもまことに云ひ何故  
うしゆえーと思つてそつてぢ。五年の記が好むし  
此亭の意味うこううん、宮丸と云ふハ其名、敬  
詔を添へり。あつは

一 心事未萬のあこ中津玄仲 三事、又のあわ  
そくにこれを醫のを書き一叶、外に鶴齋石ひ三  
浦東をこよニテアキテ、此亭の號を自分  
の家に継来一叶。おひびき十津ハ時々講釋  
スモテレ未次、若子の講釋を聽く。うつれ  
ことかひあま、か命自令。仰りてあうどくもせ  
しアリ、うきづけ、叔父の考えや女房へ  
鶴齋有ひあつて、此や津ハ金き、曾祖父ニ附  
翁の姫宅に住まつてゐつて、其のものも竹  
林伊左衛門の手も手の川と稱した所であ  
つて、三浦東をこよ津のぬき温の霧の人ひも  
立家故のへじあつたありあり時跡あひ高

家をゆき行きて、(通)ヘリ。したる金(金)や、い友軍  
に殺されたり、勇氣(勇氣)もあつて、おおうじよおお  
きのうじよが何んとあらわることとぞ感心。

一  
心事(心事)にりあるて、あうそうに、あきこへ身の八事  
輩(輩)の上(上)うそと影(影)の、故(故)とさうせん外(外)  
父(父)のあきこゑ(あきこゑ)、當時(當時)空(空)やどらんじるふ  
所(所)うりとまきうらを、母(母)不(不)条(條)もし雲(雲)  
家族(家族)一日(一日)外(外)初(初)つて後(後)、家庭(家庭)、忙(忙)で  
此(此)への敵(敵)とえけん、おと延(延)する叔父(叔父)の指導  
をまけ(まけ)筆記(筆記)の地(地)風(風)を輪(輪)洋(洋)二行  
くまと下(下)落(落)、叔父(叔父)う(う)すうつん、こくも  
後年(後年)のう(う)すうつん、あ(あ)けんともこ(こ)の御(御)う(う)ま

すう  
一  
此(此)既(既)逝(逝)れ前後(前後)五(五)家(家)ハ、そんとあひあつた  
う(う)家庭(家庭)ハ、どうか、自(自)由(由)もとんと取(取)つて、  
不(不)大(大)切(切)る園境(園境)ハ、あること、ニ、リ、と、は、脚  
う(う)言(言)ふて置(置)く、自分の家(家)の、紙(紙)傍(傍)ら奴(奴)  
豪(豪)じあつて、細(細)傍(傍)布(布)豪(豪)の、湖(湖)豪(豪)じあ  
じあつて、七(七)豪(豪)あうちうしんと、七八(七八)衆(衆)  
主(主)の、いのちの、一(一)雄(雄)牛(牛)の、が、も、地(地)の、七八(七八)人(人)の、雄  
此(此)家(家)本(本)中(中)牛(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)  
欲(欲)で、雄(雄)牛(牛)お(お)寄(寄)りて、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、  
(牛)、(牛)代官(代官)ハ、此(此)地(地)、牛(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、(牛)、  
位(位)と云(云)ひ居(居)了(了)

一 作新間除きを家で做とづつて居る  
のじう、陣本派生を主とし併し相ありつたと  
考へ、先秦ハ元盛うて派出場をもあつてゐる。  
~~其~~  
内谷らもエラフ見、シト打  
走り、財産ハどの仕立ちとある。全盛期  
では、自家と清く利口無つてあらうが、  
係し世間も厚く仰れども自家もし  
自家の家であつて、まの内因ハ三箇所  
のほゝ廻船業を多めにあり大波打等  
と交わる」と云ふと見ひゆんのひあらう。三  
組あの晩年、仕え方角山の松風閣の  
余を含むて紙面に本にこそりあらう。

用務ハ至家に賴つて藩の戦政を救シ現  
在為めにさうじとひく年多幸のからも  
御えど、多くの商賈のあつて物を各家  
輸送するに、事務も、うもうつて  
あめうす實力も他ども以上ひあつては、見る  
き多勢の事無い

一 今も二十数年前の事、随つて  
は海道函館に海された者、たゞう  
ことある某貸す家の縁と並みに所をう  
こ、牛は其鉤の大火鉢より自分の家  
の横木爪う鐵めえんこちく、山花の能  
ハ圓の記章、凸出してあらぐと云へ

以家家主がちの洋見りと此家、吉家  
：ゆゆうある、吉家、四船主も一興つひ、  
の形じうれじに車じゆの花とゆのしは  
ゆ一時三階ニ高てキモイ菜くと  
盛んに達乗とぞうじ、うるえ残り、つ  
の様ひ、吉家の紋や記章、とつけを  
つりと深海をあくして考り、うる  
あくし云ふが如く、四船主業と之  
をもじらに日暮の花の吉家の植民地の  
御ふよむと或許もの状況、と推し量  
うて極る氣もする

一 三船主ト木原ハ化粧のオウチツセキ

彦と筆を滿主が、圓船主をやう米舟傳  
ササヅヤもうゑの落葉と活動のあ  
言ことえども、うそと此人の代々ハ吉家の  
資産は、役合と高級と凌ぐまわらず無う  
だとしても、吉力事現年（不動  
臺）の、ハ吉家の方をあつて、もゆみの  
山の吉家、すれ後合をしてハ家祖・信富  
翁の若遠君と仲良き事故と成  
を示すに、何一つの記

ある家の模様や色の変化をう  
くし、うの略がニースある上物の眼に映  
しこもろ筋肥て向こをすまの事無<sup>ハ志徴</sup>  
も思ふ、あらわして、家前へ進<sup>ハ志徴</sup>  
五月懺とぬま馬鹿くーい玉を大き<sup>ハ</sup>  
いからう以、すえ、家前へ坐つて吹毛する  
お幅四五間もあつて板<sup>ス</sup>ろくして、風  
の大小を家の大小と或るまく味<sup>ス</sup>も立たず  
よもひみうな、風界の塗りとする板張  
の風もありて、此の風の用ひと大谷地と叫  
う大敗の堅硬の紙ひがつて、まかのむと  
よ大きるよれ之んと因毛<sup>ハ</sup>すづき<sup>ハ</sup>付丁<sup>シ</sup>

人<sup>ハ</sup>て轉轄化粧<sup>ハ</sup>化粧<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>よ  
ま、あらは秋<sup>ハ</sup>闇<sup>ハ</sup>闇<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>家  
お座<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>としゆもし揚<sup>ハ</sup>もしよじ  
あさりを放<sup>ハ</sup>き跡<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>つも詠<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>  
は一<sup>ハ</sup>とよく<sup>ハ</sup>る

一風の事<sup>ハ</sup>まだまゆの紙<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>  
が自<sup>ハ</sup>リハゆの<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>威<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>切  
没<sup>ハ</sup>文<sup>ハ</sup>薄<sup>ハ</sup>ひき<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>大<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>、實  
ハ叔父<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>が大<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>麻<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>吸<sup>ハ</sup>び  
自分<sup>ハ</sup>前<sup>ハ</sup>掛<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>と拔<sup>ハ</sup>吹<sup>ハ</sup>レ  
う<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>困<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>レ  
う<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>済<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>拂<sup>ハ</sup>レ不<sup>ハ</sup>

うあつた、まよひ一二、と津名屋ひ呼ししてこうは  
家じあるが、三この家の跡へが風の武者経と  
ちくま巧みをもつて、城ねこと白根が風の  
御すみえのうちの所ひあるか、我みめりの風  
の形、うの小風さりい、おふうと大むかわと  
つて行はせぬうに紙ねかへあつてやうて、自  
らうゆゆりうはまうりく北の風尾、也  
ひ、行き帰へう草、や、流、もと揮ふうとえ  
れおせろーと、うづにまゆび、茅の二つの面因  
う風味とよどとひきひや光りうひすう  
奥アの風を操縦するが、無く家業え揚  
けよましとせんなりうつ、手もほるまじあつ

ひの海番を揚げて風、ひや三千枚の角武  
ひうち枝は、ひうち枝、節めの風の敵なりと  
うゆとゆのまよじ、身と大ゆひあつて、風  
の敵なりとまよじ、壯士四士の敵なりあつて、  
とりすえあまよ無ひ、壹丈五花色の枚の  
風と出一と大努力、とつて市中と揚げて  
シヒトよくし、とまよじ揚げて下す  
ゆく洋て、竹内の香りの花の上に、  
う柱早う、風と完き、枝、十、レ、霜  
と生一と大努力、とつて市中と揚げて下す  
ゆく洋て、竹内の香りの花の上に、  
ゆく洋て、竹内の香りの花の上に、  
い、あゆのことを、狹邊の町や、じる枚の風

と居するをハ毛地あるじあらの春半代  
でちんに乞ひ出るをも出来に許しある  
は國の風杜と謂えども自らのものと言  
つてかくおへことをうつにせよと、全  
家よりとしあくやう男の一團と仰し  
あれりけつ風ぬきをあつた

-1

北條と徳川氏の末裔ひ優長時代より後ひめ  
つて、其の家も食客もいえへり多く  
未だ、自分もかくしてうそその内ひと四半世と  
あ大きな坊頭の家刻のう長くあると  
つて北人の和紙や絹織を多しもてうもが  
東波湯河の星々を以て、うむとよひえ

て日生島の山とあらひにしねんふくせりす  
えひ、家刻のちゆうじ出来、之の刻に仰  
せ重ううぢも家・有へてこそ、がに是  
官様(此度)と云ふ画家うへしくぞうと  
終に坐て、家に致て、之へ差後ひの至  
のものがある。東波湯河の星の大家の海  
川のあらうが、つづく世流とて、雪様墨  
成と云ふと、少納門、之れと載つて、古  
南巣(と云ふ)と私拂(と云ふ)、絹本に書いた本  
のうちを家に有へてこそ、印も大部  
ありて、賴支峰の下りて本と足り

ハ御子さんから今自家にて居せり  
う以、村山とまよち家も今自家にそん  
そうど此種の風習に入て家業を耕す  
者、生来もありある、後事あらずして養  
耕一生と致うる、皆様の感化ひき張り家  
生入る。もと一人画家う出来ぬ、とくに之  
方修耕す、いはゞ一家の徳教既ひ微薄の  
事也と云ふんじあ。セアム、えも何等  
考えず脩得をや見えなり。利助の感化する  
又父の義をえべば、家計無事とせ  
えり、是の感化ひき張り大へり有ると

秋収穫を仰ぐる毎年数次清ちともろく  
江戸、登高を車で走らんが、余の幼の  
時代、とき見る度の清ちが花に咲るねじ  
堆をうそとあくび、めぐらしもえくする大字の  
桜ちがあつて先手の方に植え天才ひあつ  
れと思ひてさう、先手の桜や早春未生  
其父もおととまで見え又母の「能不く此が  
女兄弟の美術界の能あつらう」といふ  
とお血統もしておこそうむあらう

一  
お酒言ひよと心得ぬ、此尼の和歌を承

まんべ、田舎丸を河とすれぬうつてくの  
が威家わらみ家うち國へ附二代の御政  
をももす人あらじま、さうきの風に由  
ひもじある。此の方角に、江戸流の御配  
を御正にあり、二三ちうじ、おはりゆかた  
と交りえり、有祖母の言葉、  
えみれいめいづちけりひ、えと精さ役  
あら經冊をもてておひそかの者よし  
お十冊と強うてそろひをばく人の者よし  
あら經冊をもてておひそかの者よし  
おまくをせ教わる

-7

道里をもとよりおまくをやひあつてうそを

うれいせじ江戸の宿の、  
金高と辰巳に引継ぎ、以後もまた、春  
節ひと宵が四の毛エとやええ後半云  
あり、うちもとある。うのほじ見ゆの家。  
これちかつて細井彦源の居宅とみと修  
記する。一年半前二階にそむく、うえら  
佛見ゆが、佛壇を中心として、それら  
くえ皆う前二階にそむく、うえら  
がおもろく、行とくえことく筑  
味、故郷をえけり、おおに思ひそ  
うつてあまく、北山の、すま家

抹茶玉毛うじまの雪祖母の死佛と抹茶の  
御味うじまの茶豆と土瓶の事  
うじまの傳筆、雪祖母も茶と豆と先  
考も茶儀に毛うじまの事とえんふこと  
えんふう、茶味代りよまへい  
と呑み茶豆子の粉を用ひて、自分(一)  
の祖母の所おき茶豆とゆくと欲し  
がつて、雪祖母は生長後必ず其事と  
ゆくと、ゆくと終て約のこととぬる年那  
れど、これよりの意味の花やつてす  
雪祖母のよい今いづれ大和こ花し

了、或芋もすむ其房の内、自合に吸味、  
董化とうじまの事と

一 ち一木の根あるやく叔父うじまの事  
も家一と特高油味噌の歎をもと取度えと  
ヨリ命令と云はるの音節ひまく衣と  
列つらが北の段入居の邊藉のへい盡と相  
あく書えど、これも雪根の董油界があ  
う、雪祖母うじまの歌集あわゆる數と  
和本と字ともえ、其の桜絵(一)此の桜文  
居う例くうじまの事と、自合も初かの  
牡丹うじまとちて皆うつてことうあるが、  
今も遺墨う片紙を取てありと遺儀

一 善祖母の配偶と義い娘、上方へ上る木舟路と  
往き旅行をさんざんにとうあるひのひ幼少の頃や  
旅行中の事と物語りうあつた、りそこの名  
所圓金寺も高長石と備ひておあつて、旅  
行宿泊する時もさう本堂よりおまへてうす  
えで細のまゝ御船と何とぞ車す  
ろく出づと、別して此所圓金寺の桺修を  
えよことう大ぬき、さうした、善祖母の旅行  
中経験や歴史や其の他此所の宿泊うち  
種々まことに十数と紀念として集めし  
べしと見え、その朱漆地名の鏡とんす

のと夏、さうとお皿の田へ入れて床の上  
立き、えに付ておまく思ひ出を語る  
こと

一 母の趣味と云ふへき草双葉を獲  
ち草がありて毎年数次舟江にひ候ふ  
うじりの後をわとも寧ちて落葉  
れど、程々ハお化るびを語りておこゑが  
く聽へじよのう、此の後もトモ持つてある  
私脚、又より錦絣の衣服や火おこし無い  
珍りいものと自分の土産に替り手土産  
いよいよいつも朝御のまゝうりと小箱ころぶ時、  
てこうじよる

新まる田の田姓助次郎に主へ骨董鑑定  
うす茶と高僧像と骨董をも取つて、自  
らは多くある毎に、形の行李に茶器の数  
と算上に入れてます。またよし、此へりあ  
が多、あると申すと行つた事もわざつても  
う例へあつて所、うる着ぬに例の行李と  
走馬令状するく沙生とて例のこく  
薬茶器のやあうもうち現れん出で、此人の  
配偶は自分の祖母にあらへひあつて、西茶の  
曾祖母とちに初つに次、助次郎の配偶で西祖  
母のあす後、この事は左左に至りて、此の  
婦人ハオ娘となりて、主と毎晩抱えん。

寝ておし物や傳説を聽くのをわから  
う事へ思つた

一  
北極玉瑣もとゆするハ要するもの極ひあ  
う家庭の珍奇園境を算りのゆえ、身  
に或多くの珍味教育をうへて、かゝるい  
様に思ひて、この瑣もとを思ひ出さま  
ちやつてゐるわあ

あ思ひ出そよー一二〇吉とへく、身の  
家と自分以外の外女心は無つきと重ニ  
ウ即ちと雖と飾つて、これを曾祖父と上方  
もとへて育てられたが、其家の誇りとして  
止の洋和風抱てゐるわうゆうゆうゆう、

と大形のもの、西洋流、オペル彌と云ふ大  
小の造りと立と見え、老家の土壁をうねキ  
一彌が、此處にこれ以上大きな彌へ移さ上方  
に棧木地とよぶにひぢらゝ、木船場と  
本堂奥月廿日、室を寒くらむひ、内裏  
の坐に見上るもすこし積み天井にしひ  
経てあつた、此のまゝ即ち時代の豪家も  
雖と飾り立ておきねえといふのみ自分  
も飯村とよぶ豪家の難と見え行つたが  
自分の家のそとへ通ふるや我模のものひ  
あつた、

・ 仰龍とよぶ洋館のうなじ、日本と老家の

：物を右し連り洋館をもつてことあるま  
せん、日本の方、士官とも向うの立派な人ひ可  
つたゞきひと思ひ出すとぬるもを示し、あ  
つた頃、又國をはんびん諸侯の行列を手  
てえことなく二十七晩けに持あや旗や、紋所  
をも番しまく行つて校ひあつねば、少し氣  
味のある方とお化うまく行つて校す  
思ひたる

・ 自分の乳母ハラハラもあれど、而強て卑  
いさう性質でよくうど、その乳母も  
西部は痘痕をあくまで地のうまい女  
であつたが、自分の乳母は寂族に汗

判  
の親母と云ふと呼び家の親母をいへ  
と呼むひそつて、自今う親母の名のち  
お局嫁一歳の日從う六歳の時云  
つて、さうもす時、自今ゆう約ねにちつ  
うつて曾祖母、一為ゆう時後まの親  
母を此くさん、ヤツト

山子  
睡る

私家、巻よこすんに其父の名をあらえ  
数月、家を金の家に帰り、隠居庵、  
居えにことある自命、由長トモ哉の  
人、愛すんが毎日遊びに出来時く

ハ抱えて寝た、叔父う自今う娘姓と肌膏  
を男子、持つて云ひれどりを幼少の抱  
えに寝たことあると云ひ、叔父尼ハ號  
成しに印を刻さんと、自分と山を  
どと船つて印をなましとえられ、舟頭を  
ルと傳氣と行くと樂しましに作

あつ

一  
叔父の妻老尼う先考の助氣と傳え被  
月裏の内室か屋で轎候一洞で申ヒ奴  
僕の鄰居に相聞さんと見えにことづ  
ちつて、これよもづれよと自分一人であ  
る君も無聊涼キ所くと必ず手筋を

ちいし美んえに、まやがりえんくも勉強し  
毎日攻うけれることを思ひ出す

一 父亲の飲料のたぐらの所であつたう向今  
家の井戸の井戸の上の方であつて、井戸の上  
くはあら連ぬる椎の大樹があつてゐる  
あつたうちか、近所のよううひめをひいて  
よと無難に許さん。まよひとまよひとまよひと  
まよひと

一 大人ふさと無くさん、方々うと押す  
をえひんに極ひあつて、自今の印時、  
何ううし懺の押すもと教わる事だ  
スハハ勝負昂の極み大業トニ全

豊に港へに墨汁と含むせ一揮ノ格  
の一行と記されたことある、まや陽と  
ぬうも不き、あるもの、二十間もあ  
る土蔵の側面、布地を磨きぬうと  
見えうるおこに伏せある

一 父亲の陣元、まよひと本家、うきくと  
つじあらえ片田毛石供給に海運ひあつて  
まあ毛石も、よ田畠とお宅とふうあつ  
て何うもあらゆのよひあつて繁榮うじも  
く盛せい料記念もあらゆのよひのあれ  
かね秋今より壽司と賣り始める

一 湾川の真路、叔母う嫁さんて通家さん

今之えは叔母の子ひあるがまの見えます  
てうれしう自分と同年じ厚太郎とあれ  
共へ天死しきり切時リ大仲善しげあつ  
れ、ちよ時重本す。自分ゆく。かわい  
に耳にひきうちのねひときつひのぐさ  
思ひ出し。悪戯と考つてゐとふう  
う果んと。家の前二階の一半が戸  
じ仕切られて櫻御舎こうとうしてつぶ。  
様二人ひ家内十とあん田て。ス言  
入とまと四五の床う取つてやり片行  
けに無い。きに二人ひ申合へせて冬を  
の床に小便をう一つで垂れ流して

久留と極め込んで、ある寝か便を  
へ、ままでつけた某もあつて此もが供  
の行うぬ部をひあまつて、さんくの悉  
戦と誰れか氣き、何ううつてひとえ  
えを問ひ、どうす仕あつてあつて  
ひとあく附りておひと行く所とうべ  
外城堤と出湯ひちつて、外城と堤町  
と通家能びの家もちつて、まづく  
きひと出、うけん、こへ用ひを湛へて置く  
可う高うい池ひあまつた防ぐ算を  
や河骨と生し、草ハニのぬめひあ  
つと池島の内田也篠へうきと植

えをあつて花時、艇と浮へしよするを  
盛んよとひあつて出湯にて以てす  
より父も子伴えどもさけんが行ふる  
つゝ、今の御奉公も無の頃ひ、旅食も  
舟のうにが、溪流と其日かじかうす  
旅を取る。出湯に船はる一處あ  
つる、僅うて紙、ふと駕籠かいろうじ往来  
たる里まち、宿ゆに被る氣  
がして

以上録し所、皆の身の六歳むろの事  
多々こころに時の思ひ出でてある前原  
うそとほの事ことを一二記せん

一 前原一誠(彦太郎)の私家に仍しここと  
前二才記し以て、ちきあつてことと氣ら  
けいじ、飯後府う設けれて、三早馬と江  
一比の事思ひ起り、府う設けられし前  
ざあつと極め、前原は又時分巻簾格のへ  
じあつて、今まへば大臣格のへひある、つ  
其人のあつて荷くわひとと老家ひとえ采と  
しむし、つれ、家の本庄安<sup>セイ</sup>也明<sup>アキ</sup>居  
つれに前原の希望ひきわからつじあらう母屋  
ヨリ母宿おやどを即そくの隠宅ひきやに宿す  
よし勿論隠宅全部をゆけし其の高所  
よし、下の壁敷を应接所と用ひ見る

たらしく、前原ハニ階を居室ト寝所  
も同じく二階ありしに、あま毒ハ伴えず  
三人の小姓が随役して居つて、北ヨ三介ハ  
皆其級後ア有りあつて故に、皆タリ主  
に於、一人立ち後ニ鄉人伴ノ退院の卷  
子と見つヒ、伊藤博士ちつヒ、此へと  
其立英洋の校時代、同窓とううヒ  
と/or、大審院の判事と見入る  
ハつ考

一  
前原とよみ人を自顔面に瘡痕のある人  
物と無れ着ふ沈黙のへじあつヒ朝至  
ハ今の十時頃迄も寝て居る極る人ひ

鷹揚る人ひりつヒ、金錢をとひるを求  
候着るも、を家に布一そひ冷窟食料  
をも拂ふひもく、亦無家に居ても拂  
ひも拂ふ方其の津びり無えり、あら  
いくらの体を得て居たるより、祇うん  
が奉書紙、肉体を包むびよヒ  
身巴の伏、長室の藻もすらひ床の  
間（奉書式の床の下）を行深く外部  
幕形の壁を塗つてあつて、床の方  
云々と見ゆる所は、云ひてある  
つヒ、抜け出ても、キスの觸れぬことを  
盐樹ひあつヒ、あつヒ是の皆云近

多々無くうるにとまふ洋川前原をえ捲く  
あひの有志家よりうく無心とてよき、  
さり金を捲て上げた、個物を洋川す  
うかねをちる時、旅費も無い所あむ  
始末で今く家主が武許う出来一仕  
じあつれ

一 斯の大官の宿所とまうじ老家に朝夕  
訪ね来る各方面の人々をや、そぞ連拘  
をを持込むばもの多く、うつて、中々と  
魚類をもと持てて來て、夏時宿舎ら  
にこども板をあつて、五家しき最初  
の内指揮と音けず、始末こゝへは云

うめと焉正直に近頃の魚類と其體と  
して豈いにか、國無銀石の二文公元  
うもと氣のつく人ひるい、うる済みを  
指揮と待すに至るく始末あること  
うめと

一 前原の止宿中ちう時裏門、まづりく  
と這入つて来じ壯士風のようであつて、  
そくハ羽織袴を着て色す兵児帶  
大刀を揮ひ、眼光炯々、面毛漆の如  
く者多く見つかり、の様子であるの  
じ裏門の事人（家の様）に、お詫仰す  
マと前原をもじと云ひゆびじれり

名セラリテ、六庭と前原りをもとニ附  
ヒ上りつて、これより奥平が近酒類をあ  
フシ、あく、犯交の問題で元年冬に西  
令びあつて被ふれど、ニ際ひあへたら  
一に時をも、アーネンと前原も  
簡單と云つて切わらうなどとや姓の  
説してある。

一 奥平の訪ひ未つて吉味ハ解らるい、後  
・ 奥平が佐渡政廳の長官とするつい  
モ、うちあらんハ或ハ前原と呼ひ寄  
セシよ歎きをも中央政府もレ庄  
余と音を来しもの、ハウハ科

一 奥平とまゆ人の前原とハ今ハ性格の  
異つて居つて、苟ヨリ性急び酒ハ斗  
酒モ辞めと主觀も、朝ハ鶴鳴起  
起きも大聲に音を落すと少く  
人と渉りまゝ音を擧げり事モ第モ  
動作ハ快活と云ひ、口と墨暴に止  
ム、立毛モ毛物を修めず、以ひて  
揮毫もし、紙に墨云て主とこう文  
を寫す、ゆ文と書くハ其人の墨も得  
立毛とす所ひあらヒ

性格全く異つてゐへう一時同室に祀  
仰してのと有り、奇く視が少姓也う丈  
所先居に詣つてとふと夢くよ  
あへ因衾レレ朝ヌヨモと奥平ニ  
六時三刻よりは内に大駆け、後  
ちとまつて前原の眠をえまするの  
ヨリ前原も御ルレレおめしと因  
じて謂つてゐる。

一 前原と奥平もや先を實ヒ比拵、ひちつ  
た、これくらえオ、うむ、しんでもうと  
ハ連ん込々葉方すうとちうれことモ  
タあつれ、年節氣氛、びちつとる、別：

日暮の岸す、とわうと後もと推  
さげて行つて額を、まひて安づれ  
こもる事、今も見え、こども、奥  
平うちいと差すんで二字額の文、  
被幅とあうひ、や先こおりしくれる  
ヨシヨシあ浮を撥もじのとすと  
謂ふべきゆえも、船に轟せば  
古事記に家族を移しに以、舟  
つも、船にあつて、今、無い、  
前原のちも、一島も残つてゐぬ  
山年生まで奥平う御ねこち  
いじマツリとミね得れ、えも記

念の見物に寄りて居ります。又  
奥平は仰ぎ後む家へお寄りに  
長間はさくとおもひのをとらじと額  
とまつておうじよびつたきとあり  
テとゆし巻とある、前年の  
書わざとお其のおをとるため  
先月に此處で研、う一面あるま  
だ

一 前原は御役をとる時に耽んであつ  
たりどううかんが身を連れ  
行きたいと云ふなどいふ家では  
いきうれしうめうてすう當

一 おまことに往つておもひ哉、死  
人をまねおもひ

一 父の房君辰は奥平は仕事に行く  
時もおまけの格好随行します  
奥平は其の左近で見えなきとある  
の詮う侍りつておもひえまこと  
お詮うとして奥平は城内をおも  
じく思つておひ後年を家を  
采地する所の福と吹送く  
おねて耳たまう所とぞ見えま  
岩船山石の松家うあつれ、そ

シヨリ急ひよ車カニシトシラアム、其のリ  
シテ此膳カタツムリアリモト例カタツムリ大酒カタツムリ  
オルニ、下シモアシシテ、要ヨウス方カタツムリアフ  
ヒヤシヒヤシ、飯ヒヤシと豆ヒヤシと豆ヒヤシの小物ヒヤシを  
下シモケ梅干シモケイモク一ヒヤシハシラム、例カタツムリアフシ  
シテ時ヒヤシ所ヒヤシ修ヒヤシ活ヒヤシミシカサヒヤシトシテ  
シテシテ初ヒヤシモトヨウモ先ヒヤシキト  
御ヒヤシ墨ヒヤシミシカツミシカツルニシトシモア  
シヌチシ時ヒヤシモトヨウモ先ヒヤシキト母ヒヤシモ  
モトヨウ教ヒヤシ来ヒヤシミシカツメシカツルニシトシモ  
大ヒヤシう奥ヒヤシ手ヒヤシの前ヒヤシト庭ヒヤシキモトシモ  
佩ヒヤシ刀ヒヤシミシカツメシカツルニシトシモ

シテ終ヒヤシ收ヒヤシモトヨウル、母ヒヤシ奥ヒヤシ平ヒヤシ  
ハシル、前ヒヤシ後ヒヤシ別ヒヤシアメツヒ  
前ヒヤシ來ヒヤシモ自ヒヤシラ、うゑゑヒヤシ游ヒヤシモ  
通ヒヤシ家ヒヤシ能ヒヤシ下ヒヤシら、寄ヒヤシ宿ヒヤシトモテモヒヤシ  
義ヒヤシもシキモト、上ヒヤシモ半ヒヤシモシトシラアム、  
シテ舊ヒヤシ跡ヒヤシアリ、シテ半ヒヤシモシトシラアム、  
シテ伴ヒヤシハ木ヒヤシ橋ヒヤシ河ヒヤシの某ヒヤシトエフ施ヒヤシ  
ガく訪ヒヤシめんことうあくヒヤシ、義ヒヤシの  
士ヒヤシ族ヒヤシハカニヒヤシヘモ附ヒヤシ属ヒヤシトモアフシ  
シテ、シテ、前ヒヤシ來ヒヤシモ粉ヒヤシ呑ヒヤシの服ヒヤシ裝ヒヤシ  
シテ、シテ、例ヒヤシの無ヒヤシの先生ヒヤシ、義ヒヤシモ

べらう簡單と言ひんどうり多  
九じえ前原と會ひあつたる  
ひちる

前原の大臣格の人ひあつたが、佐寺。  
人ひ玉政修の後政府に重税を課  
すとまふ不平より紙縞、来て  
中央政府に拘らず擅まに税を  
免トシ、ことあつて嘗心すと、深  
効をうけし宦と寵められ終ニ  
ゆあり上級と企ててひある大隈  
信ハ前原と強敵となりあつた  
う前原一味に激徒うきを屢々

暗殺に遇ひんどうじを嘗つて済  
えどことりある

零落したる村井と雪も君家り取  
傾き他人の家屋に侵入しておふ  
也奥平さう見えてもんぢも  
お島の居候まぢらひのを今く  
思ふ。さうして、奥平とち生臥び  
そも死をわ思ふと無つともかく  
も、こゝ後年には、お島からわ  
けに渡りんにちの音指に入手  
以日早(のぞみ)年(ひ)高鈴の  
秋月行樹うきのこ木山亭と

御室の根筋は木の上本と呼んで  
御室氣をうつす。秋月の根筋の色白  
ハ金り家とあるのあり松木<sup>スギ</sup>家  
家ひあつてう其のゆくよもよも  
あつて家えむたるに生て、木々  
れどもあらが、よりもあ  
あそこぞれし草れよひき、自  
かの家の聲<sup>ナメ</sup>のとほりと家  
聲<sup>ナメ</sup>底の五種氣<sup>ウツキ</sup>氣性<sup>シキ</sup>の善き  
けりとまじし外<sup>ヨリ</sup>を列<sup>ハ</sup>し方<sup>ハ</sup>  
因<sup>ハ</sup>し

一  
秋月行樹と其の聲<sup>ナメ</sup>の聲<sup>ナメ</sup>

又敵つて背に山際をねめ立  
添やに白山毛色のあり<sup>ト</sup>神父  
とすとし、さすとすと度<sup>タメ</sup>う刻  
合<sup>ハ</sup>とく出来<sup>ハ</sup>とて正<sup>ハ</sup>てど。  
秋月のあくゆ年<sup>ハ</sup>あへん日  
かくゆのとゆゆゆ<sup>ハ</sup>あつてゐのと  
ひととく言けり、一時<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>敵<sup>ハ</sup>れ  
もよがくゆうう<sup>ハ</sup>あつてゐのと  
有<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>敵<sup>ハ</sup>のと得<sup>ハ</sup>れを  
家<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>ひあつて、秋月の里<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>る  
レ風<sup>ハ</sup>とて身<sup>ハ</sup>の家<sup>ハ</sup>にまじ次  
ハうるをく<sup>ハ</sup>秋月<sup>ハ</sup>ちを

又の年は、家を引きました  
代をもとへ、秋月へ見え、摺子  
の印を捺すことを許され、  
じうつら、秋月へまよえ院も、  
寒風の匂ひます。秋印（御印  
い黙印）一秋月桂樹、一漢  
高苗裔（セミ類）を家に貰  
つてまつに

一 秋月の金の家へ達あや、  
あまし萬葉掲てやめあふる文  
をもつてくんぞ外に四五の幅  
をもつて、うちの所へ手を渡

ハ鏡を書を心うつさりつけ  
れ家作の山物直し行と秋月  
のをも、而至じところ、云後こ  
餘すと春の家の扉に未だ  
のじかくちいこちづけ、えひ初  
き書、やまとへひあうこと

うとうと

大正七年三月まるやまと

又の年は、秋月へ見え、摺子の  
印を捺すことを許され、  
じうつら、秋月へまよえ院も、  
寒風の匂ひます。秋印（御印  
い黙印）一秋月桂樹、一漢  
高苗裔（セミ類）を家に貰  
つてまつに

と拂し生すを花の体といふ事も御尤大切ひ  
うつ、且つ意味七百、更にうえつ御年少代の通  
出をあそびへとぞぞめひる



